

反テロ・平和思想を説く新しいイスラーム思想の潮流

—ギュレンとカードリーを例に

## A New Trend of Islamic Thoughts Advocating Peace and Anti-terrorism: Cases of Gülen and Qadri

明治学院大学教授

大川玲子

Reiko Okawa

＜梗概＞近年、欧米をはじめとする世界各地でイスラーム系過激派集団やそれに関連する一部のムスリム（イスラーム教徒）によるテロ行為が多発し、各国はその対策に頭を悩ませている。対策の主なもの、過激派の監視や摘発、軍事的攻撃による弱体化などハードの面からのアプローチが多いが、ホームグロウン・テロリストの発生に見られるように、それだけでは限界がある。その中で、解決への一つの糸口として、イスラーム共同体内部からテロを生む土壌をなくそうとする動きが生まれつつある。イスラームをめぐる現実を直視するとともに過激派集団が生まれる背景を考慮しつつ、トルコ出身のギュレンとパキスタン出身のカードリーというイスラーム思想運動家を取り上げ、新しいイスラーム思想について考察する。

### 1. イスラーム過激主義をどうみるか

世界全体をみるとイスラーム教徒はキリスト教徒に次いで多く世界人口の 2 割強を占めているが、日本ではムスリム（イスラーム教徒）と身近に接する機会が少なく、イスラームを実感的に理解することは容易でない。ただその一般的なイメージは、メディアの報道の仕方も影響していると思うが、過激なイスラーム系テロ組織によるテロなど残虐行為を行う宗教というものだ。しかし冷静に見ると、実際に過激な活動に関与している人や集団はイスラーム全体のせいぜい数%と言われている。彼らが継続して活動できる背景には、アラブ湾岸諸国の富豪による資金援助など、シンパシーをもつ存在があって、彼らがテロ組織を背後から支えているのである。

一般のムスリムが自爆テロを含む武力・暴力による報復行為に及ぶ理由を考えると、そこには「暴力の連鎖」という問題がある。現実には武力・暴力によって弾圧されている状況におかれたムスリムの多くは、同じように武力・暴力によって報復しようという反応を示す傾向があるようだ。

安全保障とテロリズムに関するシカゴ大学のロバート・ペープの調査研究が大変参考になる。それによれば、自爆攻撃の大半は外国軍の占領に対する反応で、1980—2003 年には

350 件以下であったが、米国によるアフガニスタンやイラクの占領が始まった後の 2004－09 年には 1800 件以上に増加し、その大半は反米意識によると言う。

イスラーム世界の暴力の淵源をさかのぼると、パレスチナ・イスラエル紛争に行き着くと思う。パレスチナの人々は、第二次世界大戦後から毎日生命の危機にさらされるような状態に置かれ、すでに半世紀以上の歳月が経過した。とくにその第二世代、第三世代以降の人々は、生まれたときから武力・暴力によって生命が脅かされた状態に置かれて生活してきたために、それに対抗する手段として「最後は自爆テロ」という発想に傾きやすいようだ。政治的・武力的に弾圧されている環境に長く置かれていると、ムスリムの誇りにかけて自らの権利を主張しようと、最後は自爆テロなど自分の体を張った行動に移すことになってしまう。

テロという行動に移す人たちの意識を分析してみると、宗教的な信念に基づく部分が根底にあるにしても、身近なイスラーム指導者による政治的な働きかけが加わり、それらが渾然一体となって現象化している。つまり宗教的な心の高まりだけから、異教徒（非ムスリム）を殺害したり、自爆テロを起こしたりしているわけではないのである。しかし一般的なメディア情報にだけ接していると、イスラーム教徒は好戦的だという見方をもちやすい。

アラブの人々は親族とのつながりが強く、家族主義的な紐帯がしっかりしており、血のつながりを基礎とする社会システムになっている。この辺は日本人とは比べものにならないほどだ。例えば、テロ組織に家族や親族のネットワークで入っていくケースが少なくない。また夫が戦闘地域で米軍に殺害されたという場合、妻に怒りと悲しみが募って復讐として自らの体に爆弾をまきつけて自爆テロ行為に走る場合もある。ただ自爆テロにしても女性や子どもが単独ではできないので、やはり背後に組織的なかかわりがあることは間違いない。迫害されてそれに立ち向かうときに身近な指導者がそれに関するイスラームの解釈を与え「自爆テロを行えば必ず天国にいける」と訴えると、それに納得して行動に出てしまう。

親族の中に西洋世界から無残な死に追いやられた人がいれば、そこから西洋社会に対する怒りや悲しみが蓄積していく。とはいっても、アラブ社会全体がそうになっているわけではなく、こうした極端な動き、テロ活動、武装活動は、あくまでも局地的なできごとである。

中東社会においては、先進諸国と比べると識字率や教育の程度がまだ低い状況にあり、一般的にムスリムはモスクに行って指導者の説教を聞き信仰を深めていく。その指導者の考え次第で、過激な考えに染まり、中には過激派グループに勧誘されて過激な行動に走る人も出てくる。逆に穏健な考えの指導者の下で学べば穏健な信仰を持つようになる。

本稿で紹介するギュレンやカードリーは、その後者に属するイスラームの指導者であり、それはさらに言えば、過激派グループに入らせないようにし、あるいは入りそうな人を引き戻そうとする試みでもある。

## 2. 西洋文明との出会いとスーフィズム（イスラーム神秘主義）

近代西洋文明の潮流は、非西洋社会の近現代史に大きな影響を及ぼした。日本の歴史をみても、幕末・明治維新时期において、西洋列強との出会いによって討幕派、佐幕派、開国派、尊皇攘夷派などさまざまなグループが乱立して争いを展開した。同様に中東地域のイスラーム諸国においても、西洋文明との出会いに対する反応にはさまざまなものがあった。

例えば、トルコはオスマン帝国崩壊後、聖俗分離の世俗主義に基づく国民国家としてスタートした。政治体制としては西洋のしくみを受け入れるが内面（心）はイスラームという聖俗分離で、中東地域の中ではもっとも西洋型に近い体制で国づくりを始めた。サウジアラビアはワッハーブ主義に基づく厳格なイスラーム国家をつくり、イランは最初西洋型政治体制であったが、イラン革命（1979年）によってイスラーム主義国家に転換した。

そこに共通して言えることは、この地域の指導者層には西洋文明を意識しない人はいなかったという点だ。西洋文明に対する反応のパターンには、大きくはそれに「反発する人」と、西洋文明にもよさや共通点を見出してイスラームの伝統と「折衷していこう考える人」に分かれる。

私の知り合いのエジプト人で、意気揚々と米国に留学したものの米国が大嫌いになって戻ってきた人がいた。それは日本人でも同じことが言える。個人レベルでいえば、そのような原体験が要因となって、その後どう反応するか分岐点になるのかもしれない。

イスラーム過激思想に多大な影響を及ぼしたサイド・クトゥブ（Sayyid Qutb, 1906-66年）は、米国留学したときに、彼のムスリムとしての誇りがずいぶん傷つけられるようなできごとにあっただけらしい。その中で彼は、西洋社会は腐敗し、男女関係も乱れ、物質主義に流れていると確信した。言い換えれば、西洋社会に溶け込めなかったということであろう。そこで生真面目な性格であったクトゥブは、西洋社会に見切りをつけて中東に戻ってきた。

エジプト出身のウラマー（イスラーム法学者）のムハンマド・アブドゥ（Muhammad Abduh, 1849-1905年）は、極端な西洋化政策を批判しつつも、西洋文明を取り入れることとイスラームは矛盾しないと柔軟な法解釈を主張した。

本稿で取り上げるギュレンとカードリーは、海外留学の経験はなく、国内で西洋の学問を学び、西洋文明の適切な面を取り込みながら、新しいリベラルなイスラームを主張し始めた。両者とも西洋世界からは歓迎される反面、本国政府とは緊張関係が生じ、故国を離れそれぞれ米国とカナダに在住している。しかし彼らの思想や運動は、母国では国民大衆からの広い支持がある。これらはイスラーム共同体の中から出ている運動であり、イスラームの今後を考える上で、希望的な動きとしてとらえることができる。

もう一つの両者の共通点は、スーフィズム（イスラーム神秘主義）の影響である。スーフィズムは、汎神論的な世界観に基づき、修行を通じて人と神の合一を目指し、教団を作り、聖者への崇拝を行うイスラームの大きな思想的潮流である。宗教の形式よりも内面・

精神のあり方を重視する傾向が見られる。12世紀以降、民衆の間に広まっていった。

とくに神との合一を目指して修行をすると、エゴ（私）がなくなり（無私）、人と人との間の垣根をとりはらおうとする傾向が強まる。その結果、スンナ派とシーア派、イスラームとユダヤ教・キリスト教等、自己と他者との違いを強調する必要がなくなり、他宗派・他宗教との相互理解、対話や融和を進めようとする動きが出ることもある。

ところが、近代になるとスーフィズムに対して否定的にとらえる見方が生まれてきた。その一つが、スーフィズムをイスラームの後進性の原因と見做し、聖俗分離を唱える世俗化、近代化、西洋化の流れである。もう一つが、ムハンマドの時代にはスーフィズムはなかったととらえ、スーフィズムをイスラームからの逸脱と見なすイスラーム主義であった。イスラーム主義者は、「スーフィズムはイスラームではない」と主張する。このようにスーフィズム的要素を受け入れるかどうか、イスラーム主義者と穏健派を分ける大きな基準（分岐点）になっている。

ギュレンもカードリーも、子どものころからスーフィズム的な土壌の中で育った。それが彼らの穏健なイスラーム理解につながったと思われる。サウジアラビアでは、スーフィズムはイスラームではないと完全に否定しているので、ここに育ったウサーマ・ビン・ラーディン（1957-2011年）には、イスラーム以外のものを認めるという考えはなかった。しかし、他の中東諸国では多かれ少なかれ、スーフィズムという伝統的環境がある。スーフィズムに注目すると、イスラームの枠を越える思想家が出てくる可能性を感じるができる。

### 3. 新しいイスラーム思想

#### (1) フェトフッラー・ギュレン

ギュレン（Fethullah Gülen, 1941年—）は、東トルコの小さい農村で、イスラームのイマーム（導師）を父として生まれた。母は村で密かに村の少女たちにクルアーン（コーラン）を教えており、ギュレンの最初のクルアーンの師でもあった。とは言え、トルコ共和国はオスマン帝国崩壊後に政教分離の世俗的近代国家として生まれた国であったから、西洋近代的な環境にも慣れ親しんでいたといえる。

やがて地元の教育施設に通い、カードリー教団のイスラーム神秘主義者（スーフィー）の指導の下でクルアーンを学んだ。その後、イマーム（宗教指導者）になるための国家試験に合格して宗教者としての人生を歩み始めた。モスクでの説教や教育活動が評判を呼んで注目を集め、支持者を広げていった。そのため逆に政府からは厳しい目で見られることもあった。

そうした中ギュレンは、困っている人や貧しい人々を助ける運動を展開しながら、イスラームに基づく勤労と教育に関心を持つようになり、彼の理念に基づく学校や大学が各地につくられていった。90年代以降、海外にも版図を広げ学校教育や文化的相互交流のための活動を展開した。日本にも支部や学校（インターナショナル・スクール扱い）がある。

こうした運動を一般的には「ギュレン運動」と呼んでいるが、彼ら自身は「ヒズメット（奉仕）運動」と呼んでいる。このようなギュレンの理念を大まかにまとめると、イスラームと西洋の相互理解の促進、教育の向上、喜捨に基づく弱者への援助などである。

以前、私が視察した米国にあるギュレン系の学校は教育レベルが高く、数学競技会でメダルを獲得するほどだった。そうした評判を得て学校周辺地域の人々が子どもを通わせている。ギュレンの学校は政教分離を原則とし宗教教育はせず学内にモスクもないので、一見するとイスラーム色はなく、ムスリムの学生もほとんどいない。校長など経営陣および主要なスタッフはトルコ系のムスリムで、その国の高度な一般教育を提供している。イスラーム系の学校であることを知らずに通っている学生もいる。イメージとしては、現在の日本のミッションスクールが宗教教育はあまりせず、非クリスチャンの学生が多いというようなものである。

こうしたやり方がギュレンが考える「ヒズメット（奉仕）」なのである。人の心にイスラームの教えが根付き、それに基づいて奉仕（実践）がなされればよいのであって、実際の奉仕内容にはイスラーム的要素はほとんど見られない。イスラームは奉仕の宗教であり、平和的に異文化・異宗教の人たちと交流や理解を進め、イスラームの教えは心の中に収めて、あとは人と人のつながりの中に信頼を醸成していくという生き方である。内面を表すときは学校経営や被災地支援などの世俗的形態をとるので、一見するとイスラームだとは分らない。

またギュレンの教えは、トルコでは富裕層やエリート層の間に広がっている。支持者は欧米などへの留学経験者も少なくなく、官僚や裁判官、経営者、大学教員など知的レベルが高いといわれる。そのほか、新聞社や銀行も経営するなど多角的な活動を行っている。昨年（2016年）7月のクーデタ未遂事件では、その背後にギュレンやその支持者がいるとして、エルドアン政権による弾圧が行われた。その結果、多くのヒズメット系の学校が閉鎖され、その学校の教員は逮捕もしくは海外に逃亡せざるを得なくなった。

もともとギュレンとエルドアン大統領は、盟友といわれるほどに仲が良かった。ところが近年のイスラーム復興運動という大きな潮流の中で、ムスリム同胞団とも近い関係にあるエルドアン大統領が次第にイスラーム色を強めていくにしたがい、ギュレンと袂を分かったのではないかと思う。世俗国家を自分の思うようなイスラーム国家に作り変えていこうとするエルドアン大統領にとっては、イスラームの信仰を内面だけにとどめるというギュレンの考え方は生ぬるいように見えたこともあったかもしれない。

加えてヒズメット運動は、トルコ国内では学校だけではなく、新聞社やテレビ局、さらには銀行など多方面にわたる活動を展開していたため、政権側としては立場が変ればある面で「脅威」の存在となり得る。新聞社の主張は、西洋的な感覚からすれば妥当な報道という感じがするが、政権の汚職などを暴くことに力を入れたので、それが政権側の反発を買ったという側面もあるだろう。ギュレンとエルドアンの決裂の直接的な原因は、政治的な立場の違いが大きかったといえる。ギュレンの支持者の多くはずいぶん熱心な信奉者た

ちで、定期的に集まりギュレンの著作を読んだり、日々ブログなどでその主張をチェックし、実践に移したりしている。だが今後、トルコ国内での活動は厳しいものとなるだろう。

## (2) ギュレンのクルアーン解釈の特徴

ギュレンは、クルアーンの解釈書『クルアーンを内省的に読む』（トルコ語 2011 年，英語 2012 年）を出しているが，その特徴は伝統と現代性の双方を併せ持つものだ。加えて非ムスリムにも共感を抱かせる内容も少なくない。

その解釈の方法はスーフィー的とも言えるもので，クルアーンの句にはすべて「外的な意味」のみならず，「内的な意味」があるととらえる。つまりクルアーンの字句には複数の意味があると考え。クルアーンは言語的な美しさと深遠さを持った豊かな言語で啓示されているため，「意味にはいくつもの層があり，知識や理解力がどのようなレベルの人たちでも満足させることができる」という。このように意味の多層性を認めることは，解釈の可能性を広げることであり，同時に他の解釈も認めることにつながる。

さらにギュレンは，自らがクルアーン理解の深奥に入り込むことを志しているだけでなく，クルアーンを読む者たち自身も内面的な思索を行うことを勧めている。内面からクルアーンを読むことができる者は，現実世界の問題解決のカギとともに自分自身の精神的な満足を得られるというのである。

実は，スーフィー的なクルアーン解釈は，ムスリムの間では評価が分かれていることも事実である。「スーフィーのクルアーン解釈は逸脱しており，物質よりも精神的なものを過剰に強調している」との批判もあるが，ギュレンの解釈においては，精神的なものが過剰に強調されているとは言えない。むしろ彼の解釈は，古典を踏まえつつ現代的であり，精神面と現実面の双方を視野に入れた，バランスの取れた著作であると思う。

## (3) ターヒル・カードリー

カードリー（Tahir-ul-Qadri, 1951 年ー ）はパキスタンのイスラーム学者の家系に生まれ，高名なスーフィーであった父から宗教について学んだ。その他イスラーム学校で学び，パキスタンのパンジャブ大学ではイスラーム学法学博士も取得するとともに，同大学教授，学部長も務めた。さらには法学者として司法の現場でも活躍し，連邦シャリーア裁判所の法学アドバイザー，最高裁判所の上級シャリーア裁判官なども務め，1980 年代には「国の指導的なイスラーム法学者かつイスラーム・イデオロギーの復興主義者」として知られるようになった。

カードリーもギュレン同様に，ミンハジュ・ウル＝クルアーン（MUQ）という NGO をラホールに創設，その後 30 年ほどでアジアや中東，欧米の 90 以上の国に支部を設けて，世界中にネットワークを構築して活動を広く展開している。ミンハジュ大学をはじめ，ミンハジュ教育協会によって 572 以上の学校や大学をパキスタンに設立すると共に，ミンハジュ福祉基金を通して世界中で人道福祉活動を行っている。加えて教育プログラムや講演

会、出版活動も進めている。一つの特徴として、講演会やセミナーで神秘主義的な修行もそのプログラムに組み込まれることがある。

このようにカードリーの受けた教育や行動様式は、イスラームの伝統に根ざしつつ、近代西洋的な手法で展開してきた。さらにその伝統的な領域も、法学と神秘主義というイスラームの知的伝統のなかで対立しがちな二本柱に立脚している。知性と行動においてバランスのよさが特徴となっている。

ここでカードリーの思想的背景にあるスーフィズムとパキスタンの国情についてみておく。国民国家としてのパキスタンは、インドの独立の際にムスリム国家として分離建国された国で、国家としてはイスラーム主義的傾向が強い。だがパキスタンは歴史的に神秘主義教団が多く存在した国で、一般庶民の間には深くスーフィズムが浸透している。

そのようなパキスタン社会に「スーフィーの聖者廟で祭礼をするスーフィズムはおかしい」と主張するイスラーム主義者が出てきた。例えばパキスタン・ターリバーン運動は、ノーベル平和賞受賞者のマララ・ユスフザイを銃撃したことでも知られるが、スーフィズムも攻撃対象としている。彼らの目からするとパキスタン人のスーフィー的信仰はイスラームではないために、テロ活動が行われるようになった。その結果、社会が分断されるようになって、パキスタン国内ではテロが多発している。

こうしたイスラーム主義者と穏健派の対立は、パキスタンに限らずイスラーム社会内部に根深くある。前者によってどこかで暴力が行使されると、また別の場所で暴力による報復こそが解決策だと思ってしまう人が出てきてしまい、暴力が連鎖して続いていくことになる。

おそらくこの暴力の連鎖は、パレスチナにおける暴力が大きな影響をもつ根源なのだろうと思う。アル＝カーイダはイスラエルの解放を唱えてアメリカ同時多発テロ(9.11)を起こし、ムスリムの若者のなかにはパレスチナの悲劇を知って何かしなければと考える、イスラーム国(IS)に身を投じる者がいる。パレスチナの状態を見ながら、ムスリムの問題の解決に必要なのであれば暴力行為に訴えてもいいという考えの人が出てきた。その後、暴力の連鎖が中東地域のムスリム諸国に拡散していった。パレスチナ・イスラエル問題の根本的解決が進まないと、中東地域のテロ問題も収まらないのではないかと見ている。

#### (4) カードリーのファトワー (法的判断)

9.11以降パキスタン国内で、テロが多発し、政府組織に加えスーフィズムの聖者廟やシーア派施設へのパキスタン・ターリバーンによる自爆テロが頻発するようになった。その中でカードリーは、武装過激イスラーム主義のテロリズムに立ち向かうためにスーフィズム的な穏健イスラームを主張し、テロを撲滅しようとした。そして時代状況に応じて新しい見解を出すこと(イジュティハード)を重視し、現状の問題を踏まえた「ファトワー(法的判断)」を発出するようになった。そこでカードリーは、スーフィズムに基づき、イスラームは寛容、平和、愛を主張する宗教ととらえ、反テロ・平和思想を提示している。

「ファトワー」とは、ムスリムの日常生活に欠かせない、イスラーム法に基づいたアドバイスのようなものである。ムスリムが日常のさまざまな問題に直面したときに、ウラマー（イスラーム法学者）に質問し、これへの回答としてファトワーが出される。ただし、法的な拘束力はなく、学者によって回答が異なることも多いが、支持者の多い法学者のファトワーは社会的影響力をもつ。昨今のようにインターネットの浸透に伴い、「サイバー・ファトワー」がムスリムの若者の間で広まっている。ファトワーはムスリムの生活のあらゆる側面に関与し、行動の指針とされる。

パキスタンでの自爆テロ頻発という状況の中、カードリーは、それらをムスリムの行為として否定するためにファトワーを発出した。2010年3月にウルドゥー語で、同年12月に英語で出版されたカードリーによる『テロリズムと自爆攻撃に関するファトワー』の書がそれである。この書は諸外国で好意的に受け止められ、例えばBBCは、このファトワーはアル＝カーイダの暴力的イデオロギーを解体するものであり、アル＝カーイダのメンバーが若者を組織に勧誘する際に用いる議論を論破する根拠を示していると高く評価した。また英国のムスリム系移民の若者が、親に知られずにISに参加し自爆テロを行うという事例が多く発生し、英国全体でこれが大きな社会問題となった際にも評価された。

カードリーの執筆の意図については同書の冒頭に述べられている。それによると、少数のムスリムたちがテロをジハードの名のもとにイスラームと結び付けようとしているため、「世界中の現代の若者ムスリムたちは、実践的分野や信仰、宗教的教養の領域で、知的混乱と崩壊の被害者となってしまっている」ことから、「テロリズムに関するイスラームのスタンスをより正確に理解できるようにする」ことを目的に書いたという。

また同書は、現代のムスリムのテロについての疑問に答える形で書かれている。そして、「テロはジハードではない」「自爆テロを含めて、神が造られた被造物である人間を殺すことは神の意思を反故にするものだ」といったテーマについて、クルアーンやハディース（預言者ムハンマドの言行を伝える伝承集）などにもとづいて一つひとつ丁寧に論証し説明している。

そのファトワーの中で国家に関して、「合法的政府に対する暴力はやらない」と述べられている。もしやろうとする場合は、平和的デモ、言論活動など平和的手段で行い、政府が間違ったことをした場合には立ち向かうべきであるが、テロで報復することはイスラーム教徒としてやるべきことではないと、クルアーンやハディースに基づいて論証している。その理論を納得すればISのような組織に行くことはなくなるだろうと考えられるのである。

ただ一般のムスリムが読むには、ある程度の宗教的知識が必要なので、そのために3日程度のセミナー（キャンプ）も準備されている。そこでは指導者が教えるとともに、参加者同士がいっしょになってディスカッションをしながら、教本を読み進んでいく。このようなことを英国で始めたのは、反テロの新しい動きとして評価されるものである。

#### 4. 最後に



クルアーンには一見相反する内容が書かれている場合がある。例えば、「宗教に強制なし」（クルアーン 2 章 256 節）と寛容を説きながら、その一方では「聖月が過ぎたならば、多神教徒を見付け次第殺し、またはこれを捕虜にし、拘禁し」（クルアーン 9 章 5 節）という敵対的な句もある。現在の過激なテロリストは後者のような句を真に受けて暴力行為を行ったということもできる。イスラームの教えの中にこのような矛盾するように見える部分があることも事実である。

だがクルアーンは、そもそも 7 世紀のアラビア半島でムハンマドに啓示された「神の言葉」であって、当時は小競り合いや戦闘が当然のこととされる時代だった。もしムハンマドが現代に生きていたとすれば、同じように言ったかどうか、考える必要がある。そうすれば、多神教徒を殺せという句も別の解釈ができるのではないか。そのためには、イスラームの宗教指導者が穏健に解釈し直して若者に提示していくという作業が必要だろう。

穏健な解釈をする指導者が増えていけば、一般のムスリムもそうなり、イスラーム世界も変わっていくことだろう。そういった意味で、ギュレンやカードリーの活動に注目していきたいのである。ただ残念ながら、それにはやはりある程度の時間がかかると考えざるを得ないのが現状ではある。

（本稿は 2017 年 3 月 2 日に行われたインタビューに基づく。）

プロフィール おおかわ・れいこ

大阪生まれ。1994 年東京大学文学部イスラーム学科卒。同大学大学院を経て、エジプトに留学、ロンドン大学大学院東洋アフリカ研究学院（SOAS）修士課程修了。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。文学博士（東京大学）。明治学院大学国際学部准教授等を経て、2017 年 4 月より同大学教授。専門は、イスラーム学。主な著書に、『聖典「クルアーン」の思想—イスラームの世界観』『図説コーランの世界—写本の歴史と美のすべて』『イスラーム化する世界—グローバル化時代の宗教』『チャムパ王国とイスラーム—カンボジアにおける離散民のアイデンティティ』他。